［鹿大農学術報告 第 73 号, 25–31, 2023］

# 令和 4 年度 森林政策学分野 退職者
# 「研究の歩み」と「主な研究業績」

枚田邦宏
（農林環境科学科　森林科学コース）

## 研究の歩み

一般的に研究は，大学の研究組織に所属してからの活動をいいます。いま振り返ると，学生の時から初期的な研究活動を開始していたと考えています。私は三重大学に入学し，1 年生の時から地域の農家の人たちと農業問題について話をする地域農業問題研究会に参加していました。また，専門分野である林学では,学生の中で森林に関する生態学の本などを輪読する集まりを行っていました。また，学生が自主的に学んだ成果を発表する全国農学系学生ゼミナール連合という組織（研究者が学会に所属して発表する学生版）の役員として活動していたことから，自大学だけでなく，全国の農学系の学生との交流，農林水産業の現状やそれらを勉強する農学系大学の教育について，その場に集う農学系学生と意見交換をする場をもっていました。私が大学のあり方，大学教育についていろいろと関心があるのは，このような学生時代の取り組みの成果であり，それは研究者としての出発点でした。

私は大学の中で一貫して旧林学, 森林科学の分野に所属し, 教育研究に携わってきました。農学は，生物学（植物，動物），化学（食料），農業工学（機械，土木），社会科学（政策，経営）に早い時期から分離して研究が深化して教育研究が発展してきました。一方，森林科学は，農学部の他の分野とは違い, 森林および森林管理に関する研究を行い, 森林を構成する動植物の動態, 成長機構のみならず, 森林管理の上で必要な資源把握, 経営管理の理論, 木材の生産流通, 加工とそれを誘導する森林政策, 森林機能の中で重要な土砂流出防備等に関する砂防技術や水源涵養に関わる水文学に関する教育研究を一つの教育プログラムで実施することにより，森林管理に関わる技術，研究者の養成を行ってきました。農学部の他分野からすれば，研究が未分化している一方で，森林の現場との関係では，教員が幅広く森林管理について語ることができる人材を養成しています。

このような旧林学の中で，私がとりわけ研究者として対応してきたのは，森林経済・政策の部分であり，簡単に言ってしまえば，森林に関わる社会科学全般を対象としています。そのため，研究のテーマとしては,木材生産のための人工林経営とそれに関わる森林組合をはじめとする林業事業体組織, そこに従事する林業労働者の研究から，森林の多面的機能の一つである森林レクリエーション利用の動態把握と管理利用に関する研究，さらに，森林に関わる人材の教育に関する研究にまで広がっています。大学院では，森林所有者の協同組織である森林組合の事業展開について研究を進め，間伐期におけるいくつかの事業展開のパターンを明らかにしました。大学教育として初めて職を得たのが京都大学農学部附属演習林であったこと，同演習林では木材生産が縮小していたことから，新たな森林利

用である演習林のレクリエーション利用実態把握の調査をはじめました。

鹿児島大学に赴任してから，鹿児島および南九州地域の森林経済・政策に関わる様々なことについて研究する機会を得ることができました。森林利用のもっとも中心は，木材利用のための森林造成および木材の生産・流通・加工であり，大学院生の時までは，林業に関わる生産活動，それに従事する人々，支援する政策に関わる研究をしていました。しかし，建築用の木材需要の拡大とそれに伴う木材価格の上昇を前提にして展開してきた日本の林業経営は，1980 年以降の国内の木材価格の低下により，大きく変化を遂げることとなります。鹿児島大学に赴任したころには，木材生産，森林造成に関わる森林組合経営の研究と並行して，木材以外の森林利用である森林の畜産的な利用や，森林レクリエーション利用に関する調査をはじめました。以下，鹿児島大学に赴任してからの研究を何項目かに整理します。

第一には，1993 年に世界自然遺産に登録された屋久島の森林の存在です。前職の京都大学農学部附属演習林において森林レクリエーション利用者の調査をはじめていたこともあって，屋久島でのレク利用について調査をはじめました。屋久島の森林は，多様性に富むとともに，近世から屋久杉や天然広葉樹が利用されてきた地域であり，地元では国有林野の中での木材に関わる仕事の従事者が大勢いました。しかし，1990 年代以降は，伐採による木材生産は限定的なものになり，間伐等の森林整備が林業活動の中心でした。森林利用は，もっぱら森林レク利用が脚光をあびることになります。レク利用者の増加は，自然へのダメージを与えることになり，利用圧を把握することが必要でした。しかし，山岳地域の利用者数の調査は，国内でも一部の特定の条件のある地域で行われていただけであり，どの程度の人が利用しているかもわからない状態でした。そこで当初は，登山道等での利用人数調査および登山届による情報収集を行い利用者数の推定値を算出しました。さらに恒常的に利用人数を把握するシステムを開発し，屋久島の山岳の中心ルートでの利用人数の把握を可能とし，環境省の屋久島の出先で継続的に把握できるものにしました。このように鹿児島大学に赴任した当初は，森林レクリエーション利用の基礎的なデータ収集活動をしていました。しかし，2000 年代後半になると，林業をめぐる情勢の変化があり，再度，林業経済，木材生産，流通に関わる研究を進めることとなります。

第二には，人工林の森林資源の成長と海外からの木材輸入が縮小する中，国内の人工林からの木材生産，利用するために，2006 年から鹿児島県を対象に林業の新生産システム構築事業（林野庁）のコンサルタントとして関わりました。県内の林業，木材に関わる事業体，業界団体，鹿児島県庁の方々と意見交換，情報収集しながら，鹿児島県内の林業生産のしくみを再構築しました。この取り組みの中で林業生産に関わる森林組合と素材生産業者，さらに，生産された丸太を利用する木材加工との融合を進めてきました。私を含め鹿児島大学の森林分野にとっては，地域の森林・木材との結びつきを持ちながら，研究するスタイルを構築する機会を与えられました。これは後に農学部全体で地域連携プロジェクトを開始するきっかけでもありました。

第三には，林業界との関係が強くなっていくことにより，発展のネックとなる部分に，業界で従事する人の能力の問題が明らかになってきました。新生産システムの事業の実施を通して個々の事業体の中で働く人は，身近な仕事の範囲の中でいろいろと工夫はするものの，いままでやってきた仕事の

スタイルを変革したり，自分の生産した木材を有利に販売したりすることについて関心がないため，林業の採算性の確保につながっていないことが明らかになりました。そこで，新しい林業を目指す，林業生産に関わる全体を見通せる人材を確保するために，大学として何かできないか考えるようになりました。新生産システム事業を通してコンサルとして考えてきたことを実際に林業に携わる人に伝えることが必要であるとの認識で，社会人に対する勉強の機会を大学が提供する機会を作ることにしました。大学の森林科学分野の教育の役割は，単に若者に森林・林業技術者の基礎的な事項を教育し，卒業論文等で教育研究するだけではありません。実際に現場で活動している社会人に対して教育することが必要であると認識し，2007 年に文部科学省の学び直し事業に申請し，林業人材育成のリカレント教育を開始しました。当初，「高度林業生産システムを実現する『林業生産専門技術者』養成プログラム」として開始し，途中より「次世代林業マイスター養成講座」と名称を変更して現在に至り，2022 年までの受講生は 210 名になりました。社会人教育は，多くの場合，いままでの研究教育の成果として派生的に実施するものであり，メインに取り組まれることはほとんどありません。しかし，社会人教育に 15 年間取り組んだことが，それまで理論や原則として理解していたことを現場においてどのように理解されているのか考え，現場から研究を見直すこと，新たな研究テーマを考えることができるという点で価値がありました。今後，より実践的な活動をしていこうと考えている私にとって，非常に参考になるとともに，人的なネットワークを得たという点で貴重な経験でした。また，林野庁等が行う林業人材育成に関わることができたのも，社会人教育を鹿児島大学で実施してきた成果でした。

## 主な研究業績一覧（学術論文、著書、特許なども含む）

**【学術論文】**


- 川村誠，枚田邦宏 (1986). 林業における公共選択と合意形成—作業道開設を事例として—. 京都大学農学部演習林報告 57, 143–161.
- 枚田邦宏 (1988). 後発人工林地帯の森林組合経営の展開—兵庫県の森林組合を事例として—. 林業経済研究 113, 66–72.
- 枚田邦宏，川村誠，有木純善 (1989) . 森林組合経営展開の地域性—兵庫県の森林組合を事例にして—. 京都大学農学部演習林報告 61, 150–164.
- 枚田邦宏，藤原三夫 (1990). 間伐生産の組織化と森林組合経営の展開に関する研究—三重県宮川村森林組合を事例として—. 京都大学農学部演習林報告 62, 138–154.
- 松下幸司，枚田邦宏，藤掛一郎，小野理 (1992). 伐採動向と木材供給予測方法に関する研究—熊本県小国町の近年の動向—. 鹿児島大学農学部学術報告 42, 149–163.
- 枚田邦宏 (1993). 森林組合による間伐推進に関する研究—熊本県小国町森林組合を事例に—. 京都大学農学部演習林報告 65, 151–166.
- 枚田邦宏 (1994). 都市住民の森林レクリエーション利用とその問題点. 林業経済 652, 24–30.
- 枚田邦宏，酒井徹朗 (1995). 釧路地域における混牧林利用に関する研究. 京都大学農学部演習林報告 67, 68–78.

- 馬場裕典, 吉良今朝芳, 枚田邦宏 (1996). 屋久島における登山者の動向. 鹿児島大学農学部学術報告 46, 57–66.
- 枚田邦宏 (1996). 森林組合による地域の森林管理に関する研究. 林業経済研究 129, 159–164.
- 枚田邦宏 (1996). 芦生演習林のレクリエーション利用について. 京都大学農学部演習林報告 68, 82–102.
- Hirata, K. (1997). Forest owners' association and small-scale forestry management in Japan. Memoirs of the Faculty of Agriculture Kagoshima University 133, 71–76.
- Hirata, K. (1997). Small-scale forestry and role of forestry cooperatives in Kyushu. Proceedings of IUFRO Symposium in Kyoto 1997, 36–40.
- 枚田邦宏, 吉良今朝芳, 馬場裕典 (1997). 屋久島における森林利用(II)—森林のレクリエーション利用の現状—. 日本林学会論文集 108, 63–68.
- 吉良今朝芳, 枚田邦宏, 馬場裕典 (1998). 屋久島における森林利用(I)—屋久スギの管理と利用の変遷—. 鹿児島大学農学部学術報告 48, 31–39.
- 杉本安寛, 松久保俊明, 中西良孝, 萬田正治, 枚田邦宏 (1998). 宮崎県椎葉村におけるクヌギ林内放牧地の温度, 日射環境および植生の特徴. 日本家畜管理学会誌 34, 29–36.
- 竹内典之, 松下孝司, 川村誠, 枚田邦宏, 古本浩望, 佐藤修一, 高橋絵里奈, 寺尾紀彦, 田口標 (1998). 森林の動態に関する研究(IV)—京都大学北海道演習林の天然林成長率について—. 森林応用研究 70, 77–87.
- 枚田邦宏 (1999). 登山利用者の自動観測システムに関する研究. 環境情報科学論文集 13, 275–278.
- 上野大樹, 枚田邦宏, 前田利盛, 松野嘉昭 (1999). 鹿児島大学高隈演習林産材の流通に関する研究. 鹿児島大学農学部演習林研究報告 27, 17–21.
- 藤野基文, 枚田邦宏 (2001). 森林認証に関する世界の状況と日本における展望. 鹿児島大学農学部演習林研究報告 29, 1–12.
- 枚田邦宏 (2001). 新たな経済的な森林利用とその担い手—屋久島におけるエコツアー・ガイド活動を事例に—. 林業経済研究 47, 35–40.
- 中西良孝, 原口裕幸, 岩崎絵里佳, 萬田正治, 枚田邦宏, 飛岡久弥, 杉本安寛, 若本裕貴, 堀博 (2001). 九州中山間地域における林内放牧地の衛生環境と牛の健康状態. 西日本畜産学会報 44, 43–49.
- 永矢麻希子, 朝飛有希布, 東岡礼治, 枚田邦宏 (2003). 環境を意識した登山利用に関する研究—屋久島における登山口へのアクセス方法選択について—. 九州森林研究 56, 31–35.
- 枚田邦宏 (2005). 多様な森林利用と管理—屋久島における事例より—. 林業経済研究 51(1), 15–26.
- 柴崎茂光, 枚田邦宏, 横田康裕, 永田信 (2006). 世界自然遺産登録が地域資源管理体系に及ぼす影響—屋久島の山岳地域を事例に—. 林業経済 59(8), 1–16.

- 柴崎茂光, 枚田邦宏, 横田康裕, 永田信 (2007). 世界自然遺産登録が地域資源管理体系に及ぼす影響—里地・海岸地域の分析，及び屋久島全体からの展望—. 林業経済 60(3), 1–16.
- 奥山洋一郎, 小森勝士, 枚田邦宏 (2012). 森林組合による提案型施業の課題—鹿児島県曽於地区森林組合を事例として—. 九州森林研究 65, 5–9.
- 干場信明, 枚田邦宏 (2013). 不在村森林所有者対策の現状と課題—鹿児島県を事例に—. 九州森林研究 66, 127–129.
- 枚田邦宏 (2013). 森林・林業再生プランにおける人材育成と日本型フォレスターの意味. 林業経済研究 59(1), 27–35.
- 大石卓史, 田村典江, 枚田邦宏, 奥山洋一郎 (2014). 日本型フォレスター候補者の活動実態—都道府県職員のうち准フォレスターを対象として—. 林業経済研究 60(2), 33–42.
- 新井愛那, 枚田邦宏, 奥山洋一郎 (2016). 屋久島・縄文杉登山ルートの利用者動向の把握に関する研究. 九州森林研究 69, 1–5.
- 奥山洋一郎, 芦原 誠一, 岡勝, 寺岡行雄, 枚田邦宏 (2016). 大学における林業技術者養成の課題：受講生に対するアンケートから. 九州森林研究 69, 7–10.
- 鈴木春彦, 柿澤宏昭, 枚田邦宏, 田村典江 (2020). 市町村における森林行政の現状と今後の動向—全国市町村に対するアンケート調査から—. 林業経済研究 66(1), 51–60.
- 西川希, 奥山洋一郎, 枚田邦宏 (2021). 全国の大学演習林における「山の神」祭り行事の現状. 森林研究 74, 9–12.
- 上栗慎吾, 枚田邦宏, 奥山洋一郎 (2021). 鹿児島県内の森林組合における人事管理の現状. 九州森林研究 74, 5–8.

**【著書】**

- 枚田邦宏 (1993). 間伐の組織化における森林組合の役割—群馬県下仁田町森林組合を事例にして—. 有木純善編著 国際化時代の森林資源問題. pp. 160–171, 日本林業調査会, 東京.
- 枚田邦宏 (1996). 都市周辺山村における森林利用の変遷と現段階. 北川泉編著 森林・林業と中山間地域問題. pp. 103–118, 日本林業調査会, 東京.
- 枚田邦宏 (1997). 30 万時間無事故の職場作りに成功. 全国森林組合連合会 21 世紀に向けた林業労働の新たな展開—林業労働確保をめぐる先進事例—. pp. 131–140, 全国森林組合連合会, 東京.
- 枚田邦宏 (1999). 森林組合論. 船越昭治編著 森林・林業・山村問題研究入門. pp. 93–104, 地球社, 東京.
- 枚田邦宏, 北畠能房 (2000). 世界自然遺産・屋久島の現状と問題点. 栗山浩一ほか編著 世界遺産の経済学. pp. 40–64, 勁草書房, 東京.
- Matsushita, K., Hirata, K. (2002). Forest owners' associations. In Iwai, Y. (Ed.), Forestry and the Forest Industry in Japan. pp. 41–66, University of British Columbia press, Vancouver.
- 枚田邦宏 (2003). 入り込み者数（入山者数）—多すぎるのも困るので—. 日本林学会「森林科学」編集委員会編 森をはかる. pp. 200–203, 古今書院, 東京.

- 枚田邦宏 (2006). 【屋久島】登山利用把握の必要性と自動計測. NPO 法人山の ECHO 編 山のデータブック. pp. 46–52, NPO 法人山の ECHO, 東京.
- 枚田邦宏, 坂爪浩史 (2007). 農山村振興とエコミュニティ—京都府南丹市美山町を事例に—. 大西緝編 コミュニティ社会の創造と展開—農山漁村再生の条件とメカニズム—. pp. 166–188, 農林統計協会, 東京.
- 枚田邦宏 (2008). カウンターによる利用者数の把握. 小林昭裕, 愛甲哲也編著 利用者の行動と体験. pp. 59–71, 古今書院, 東京.
- 枚田邦宏 (2009). 現段階における森林所有と森林組合. 井口隆史編著 国際化時代と「地域農・林業」の再構築. pp. 91–111, 日本林業調査会, 東京.
- 枚田邦宏 (2013). 日本における現場の林業労働者と能力育成. 信州大学森林政策学研究会編 日本・アジアの森林と林業労働. pp. 32–40, 川辺書林, 須坂.

**【書評】**

- 枚田邦宏 (2011). 木平勇吉編著 みどりの市民参加－森と社会の未来をひらく. 林業経済 64(3), 9–11.

**【その他雑誌・資料】**

- 枚田邦宏, 大畠誠一, 山中典和, 中島皇 (1992). 芦生演習林利用者の実態と意識について. 京都大学農学部演習林集報 23, 129–138.
- 枚田邦宏, 柴田正善, 柴田泰征, 大畠誠一 (1993). 芦生演習林の一般利用者の把握. 京都大学農学部演習林集報 26, 167–162.
- 大畠誠一, 山中典和, 中島皇, 枚田邦宏 (1994). 幽仙谷天然林試験地の概要と林分構造. 京都大学農学部演習林集報 26, 54–65.
- 枚田邦宏, 大畠誠一, 山中典和, 中島皇, 柴田正善 (1994). 芦生演習林の一般入林者の利用状況. 京都大学農学部演習林集報 26, 150–155.
- 枚田邦宏 (1994). 1998 年秋季大会コメント山村問題とは何か. 林業経済研究 126, 32–33.
- 枚田邦宏 (1995). 釧路湿原国立公園の観光利用について—標茶町を事例にして—. 京都大学農学部演習林集報 28, 40–49.
- 松本明弘, 枚田邦宏 (1997). 森林レクリエーション施設の利用実態と役割—宮崎県綾町を事例にして—. 日本林学会九州支部研究論文集 50, 11–12.
- 上野大樹, 枚田邦宏, 前田利盛, 松野嘉昭 (1999). 鹿児島大学高隈演習林産材の流通に関する研究. 鹿児島大学農学部演習林研究報告 27, 17–21.
- 枚田邦宏, 大畠誠一, 中島皇 (2000). 大学演習林の森林教育活動—公開講座参加者アンケート調査結果—. 森林応用研究 9(2), 105–109.
- 枚田邦宏 (2005). 屋久島国有林野事業と地域資源管理, 農業と経済 71(6), 13–20.
- 枚田邦宏 (2007). 公園利用者数の自動計測機について. 國立公園 654, 20–23.
- 枚田邦宏 (2008). 鹿児島大学が実践している人材育成の取り組み. 森林組合 461, 18–21.

- 枚田邦宏 (2009). 森林レクリエーションの今後の展望. 山林 1501, 172–177.
- 枚田邦宏 (2009). 生産森林組合の経営動向. 村落と環境 5, 3–8.
- 枚田邦宏 (2009). 林業技術者養成の現状と大学の役割. 山林 1505, 2–10.
- 枚田邦宏 (2010). 森林林業再生プランと森林所有. 林業経済 63(4), 21–23.
- 枚田邦宏 (2010). 鹿児島大学における林業生産技術者養成. 林業経済 63(6), 20–24.
- 枚田邦宏 (2011). 今，林業技術者育成の必要性—特にフォレスター養成を中心に. 森林技術 833, 2–7.
- 枚田邦宏 (2012). 将来のことを考え，技術者自らが確信をもって行動を. 全国林業改良普及協会編 現代林業 553, pp. 44–49, 全国林業改良普及協会, 東京.
- 枚田邦宏 (2012). 鹿児島大学が取り組んできた社会人向け実践教育 カリキュラムと手法の検討手順. 全国林業改良普及協会編 現代林業 554, pp. 38–41, 全国林業改良普及協会, 東京.